

古井由吉「雪の下の蟹」の構造分析

— 小川未明「大きなかに」との比較を中心に —

道 合 裕 基

1. はじめに

芥川賞作家・古井由吉（1937～）の作品に「雪の下の蟹」という作品がある。昭和44年、同人誌『白描』10月号に発表され、翌45年、講談社刊による作品集『男たちの円居』に収録された。「雪の下の蟹」は、古井が、大学院修了後、昭和37年4月金沢大学に助手として赴任していた際の体験を基に書かれた作品で、翌年、北陸を襲った三八豪雪が作品の重要な背景として織り込まれており、雪に翻弄される市井の人々や主人公の「不安」の様相を描いている。

一方、「日本のアンデルセン」と称される童話作家・小川未明（1882～1961）は、「大きなかに」という作品を残している。雑誌『婦人公論』に大正11年4月に発表されたもので、現在、『定本 小川未明童話全集』3巻に収録されている。古井の「雪の下の蟹」とは異なり、小説という形式ではなく、童話という形式を採った北国を舞台にした幻想譚である。この二つの文学作品は、発表された年、作者の生い立ち、ジャンル等で重なる点はあまり見られない。しかし、これら二つの作品に登場するモチーフに着目すると一見、共通点が見出せない両作のあいだに類似性が見出せるのである。発表順からすると未明の「大きなかに」が先行しており、古井の「雪の下の蟹」が続く形となっているが、古井は、自身の作品と未明の「大きなかに」の関連性について直接の言明はしていない。ただし、本稿は、古井の着想の源を探るいわゆる「雪の下の蟹」の材源研究に重点を置いたものではなく、民俗学や象徴人類学における神話・口承文芸研究の構造分析の手法を援用し、「雪の下の蟹」、「大きなかに」の作品構造の分析に重点を置くものであるため、この点についての詳細な分析は省略する。以下にこの二作の概略・研究史を簡単に整理した後、具体的な比較検討を行い、それぞれの作品構造の共通点・相違点を指摘していくこととする。

2. 「雪の下の蟹」について

先述のように「雪の下の蟹」は、古井由吉が、専業の作家になる以前に同人誌『白描』に発表された作品で、雪に苛まれる金沢の人々の「日常」とともに主人公の内面に生じた「非日常」を描いている。正月明けに東京から職場のある金沢に戻った主人公の大学教師が、三八豪雪に遭遇し、右往左往する周囲の人々の様子や不眠症に悩む自己の内面に浮上してきた蟹の幻想が作品を

彩る。結局、主人公の「不安」は完全には解消されないが、豪雪が過ぎ去り、春の兆しが見えたところで物語は結ばれている私小説とも幻想小説ともつかない作品である。この作品については、古井がかつてプロッホやムージルについての論考や翻訳を発表していたドイツ文学の研究者であったことと併せてその影響関係を論じた研究等がすでに提出されている。(松本 2008) また、作中での主人公の「不安の形象化」ともいえる蟹の描写に注目し、精神分析学的手法からのアプローチ等がなされてきた。(斎藤 1998、松浦 2004 など) そこでは、古井が、小田切秀雄により「内向の世代」の作家の一人と評されたように主人公の内面に生じた「不安」やその「不安」に没入していく様が端的に表現されていたことが指摘されている。このように「雪の下」は、主人公の幻視や不眠症、「二重身」(ドッペルゲンガー)といった精神分析学が得意とする領域に属する事象が登場する。まず、この「日常」の中に覗いた「非日常」という点で、「大きなかに」との共通点が見出せる¹⁾。

3. 「大きなかに」について

「大きなかに」は、小川未明の童話群中でも特に幻想性が高く、結末になっても作中での蟹の「正体」や「謎」について明確な解決がなされないまま物語が終わる特異な作品である。北国を舞台にし、海辺の町へ出かけたおじいさんが、夜の浜辺で見知らぬ不思議な男達に遭遇し、一緒に酒を飲み、みやげに蟹を貰ったが、その蟹の中身が「からっぽ」だった。結局、男達や蟹の正体は分からずじまいとなり、その出来事以降、次第におじいさんが衰弱するものの北国には春が訪れた场景で結ばれている。先行研究としては、小川敏栄氏の研究があり、「変容」をキーワードにこの作品の怪異の主眼を読み解いている。(小川 2007) しかし、未明童話研究では、「赤い蠟燭と人魚」や「牛女」といった有名な作品の研究が中心となっており、かつ初出誌の解明といった書誌学的研究に重点が置かれており、作品の内容についての分析作業はあまり進展していないのが現状である。この点で、「大きなかに」も例外ではなく、小川氏の研究の他は、舟木枳郎が、作品のあらすじに言及し、材源を推測している程度である。(舟木 1990) 単に、「幻想譚」という理解に止まらず、この作品に登場する蟹等のモチーフに着目し、その民俗的背景を踏まえて細部に解釈を施すことが希求されよう²⁾。

4. 「雪の下」の蟹」と「大きなかに」の比較検討

4-1. 登場する蟹の意味について

「雪の下」の蟹、「大きなかに」の二作を比較するにあたり、まずは、両作品のタイトルに冠されている蟹について作中での役割とその民俗的背景に注目して論じていきたい。「雪の下」に登場する蟹は、主人公の回想の中に登場する幻想の蟹である。主人公が海岸を訪れた際に幻視した蟹は、豪雪に見舞われている金沢の地にある主人公の内面を「癌細胞」のように侵食してい

くことになる。

一方、「大きなかに」においては、蟹は、おじいさんが謎の男達から受け取った「みやげ」である。しかし、ただの蟹ではなく、中身が何も入っていない蟹であった。そしてついに作中で蟹が何であったのかは明かされることなく終わる。先述のように従来、この作品についての研究では、蟹が「みやげ」から「得体の知れないもの」に変容する過程に「怪異譚」としての本領があるというような説明がなされてきた。(小川 2007) また、古井と同じく未明もこの作品の発想の源を明確にしておらず、舟木枳郎が、「想像力だけで書いたとは思われない」という推測を示す程度に止まっており、材源研究の立場からは、進展していないのが現状である。(舟木 1990)

そうした両作での描出法を踏まえ、ここで、この二作品に共通して登場する蟹の民俗的背景について簡略にまとめておきたい。多くの動植物の民俗的理解の形成に違わず、蟹の民俗の意味は、蟹という生物の生態が大きく関わっている。蟹は、水陸を行き来し、かつ脱皮能力や鋏や脚の再生能力をも有しており、岩の隙間という場所に生息していることが多い。この水・陸異なる領域を行き来するという生態が、蟹に対して「境界性」を付与する一因となり、単なる活動域の移動から「この世」と「あの世」の移動を可能にするという意味付けがなされることになる。(狩野 2011) これは、鳥が飛行能力をもち、異なる場所を移動するがゆえに死者の魂を運ぶ「境界性」を帯びた存在として位置付けられることと同じ発想といえる。このように蟹は、その生息域の移動と合わせ、脱皮や再生能力から子どもの産育儀礼で用いられ、子どもの健やかな成長を祈願して子どもの額の上に蟹を這わせたり、出産時に産屋の中に蟹を這わせ、安産祈願をするという伝承が伝えられている。これは、蟹の脱皮や再生能力にあやかり、子どもの成長を予祝するものであり、後者は、蟹の水陸の移動と人間の出産という「あの世」から「この世」への赤ん坊の移動とがアナロジーとして捉えられたものである。このように蟹という生物には、「境界性」と密接に結び付いた肯定的な意味をもつ民俗的理解があった。では、この蟹の民俗的背景を「大きな蟹」、「雪の下の子」に登場する蟹に援用するとどう解釈できるか。

まず、未明の「大きなかに」における蟹であるが、単なる蟹ではなく、中身が何も入っていない「からっぽ」の蟹であった。このおじいさんが受け取った蟹は、何であったのかは明かされないが、蟹の帯びる「境界性」や「再生・豊穡」といった肯定的な意味を踏まえると「からっぽ」だったのではなく、何かが蟹の内部に籠められていたと考えた方が妥当であろう。このことと関連すると思われるのが、結末の描写である。「大きなかに」の結末では、北国の冬が過ぎ去り、「小鳥はどこからともなく飛んできて、こずえに止まってさえずりはじめ」、「雪の消えた跡に、土筆がすいすいと幾本となく頭をのぼしていました」というように生命に満ち溢れた春の描写で終わっている。春の訪れは、おじいさんが蟹を受け取り、衰弱してから数日後の出来事となっており、おじいさんが持ち帰った蟹と春の来訪の因果関係が見出だせるのである。この蟹に籠められていたものが何であるかを考察するにあたり、折口信夫が、「春」と「冬」という語の語源について巡らした解釈を参照したい。折口は、北西海岸ネイティブの異人來訪儀礼にヒントを得、「冬」を雪に降り籠められ、新たな生命力を増幅させるための籠りの期間であるとし、その語源

を「増ゆ」に求めた。このことと合わせ、「春」を生命力が増幅して横溢した状態である「張り」にその語源を求めている。(中沢 2008) さらに、折口が、ヒントを得た異人來訪儀礼は、籠りと春をもたらす「容器」を持って來訪する異人が登場し、新旧の生命が更新されるものであった。

ここで、整理すると「大きなかに」の中で、おじいさんが見知らぬ男達から受け取った蟹は、その内部に北国に春をもたらす新たな生命力が籠められており、古い霊力・生命力を体現するおじいさんは、この生命の新旧更新といった過程の中で、北国に春がもたらされるものの、自身は次第に衰弱するという展開になったと解釈できる。現に、「大きなかに」の結末では、草花や鳥に代表される生命に満ちた春の情景とともに「おじいさんが、たいそう弱くおなりなされた」、「すこしばけた」ように見え、春が来ても炬燵に入って衰弱した様子が描かれている。このように「大きなかに」において蟹は、北国に春をもたらす生命力・霊力の入った「容器」としての好ましい性格をもつが、一方では、おじいさんに衰弱をもたらす好ましからざるものとして「両義性」を帯びている。

では、「雪の下」の蟹における蟹は、どう描かれているだろうか。「雪の下」では、「大きなかに」に見られた蟹の再生・生命力といった意味合いからは、ほど遠く、ここでの蟹の象徴性は、「癌細胞」に見られるような漠然とした「死」への不安と結び付いている。癌を意味する「cancer」は、ラテン語の蟹を意味する「cancer」を語源としていることが知られているが、主人公は、蟹の幻視とともに若年性の「癌」について思いを馳せている。これは、主人公が雑誌で見た「癌細胞」の形状と蟹の形状の類似に基づく連想であるが、自己の「死」や不眠症に見られる内面にふと生じた「不安」を端的に象徴している。主人公の内面で、幻想の蟹は、次第に衰弱し、気付かぬ間に息絶えている。これは、全て主人公の内面での出来事であり、実際にはこのような蟹は存在していない。だが、この蟹は、主人公が自身を同一視した存在であり、縁も所縁もない金沢の地で、雪に閉ざされた状態の中で黙々と日々を送り、気付かぬまま「死」を迎えることへの懼れの反映といえよう。

このように「大きなかに」、「雪の下」の二作には、共通して蟹が登場するが、その性格は、微妙に異なっていた。「大きなかに」では、一見すると蟹が「謎」のままで残されるが、蟹という生物の帯びる「境界性」や「再生」といった民俗的背景に注目するとその作中で残される「謎」に対し、北国に春をもたらす新たな生命力の籠る「容器」としての性格を見出すことで解釈例を提示することが可能になった。また、「雪の下」では、「大きなかに」における蟹とは異なり、主人公の内面に巣食う「癌細胞」のような「死」や「不安」を象徴するものであった。しかし、この二つの蟹は共通して、その根底に「死」との結び付きを秘めている。一方は、生命の更新という面からおじいさんに対して衰弱をもたらし、一方は、主人公の閉塞状況や「癌細胞」からの連想による「不安」やそれに連なる「死」への想起といった否定的な性格であった。この二作品は、ともに蟹というモチーフがもつ多層的なイメージを作中での展開に巧みに織り込んでいるといえよう。

4-2. 登場人物の帯びる「境界性」

「雪の下」での主人公は、古井自身を彷彿とさせる若い大学の教員であり、縁も所縁もない金沢の地に赴任してきて初めての年に豪雪に見舞われ、苦勞している。また、不眠症に悩まされており、眠れぬ日々を過ごしている。このように主人公は、「成人男性」であり、後述する「子ども」や「老人」と異なり、この年齢という観点からは、特に「境界性」を帯びた存在とはいえない。しかし、不眠症に悩まされていること、かつ他の場所から移り住んできた「遠所者」であるという属性からは、主人公の帯びる「境界性」が指摘可能となる。作中에서도言及されるように主人公は、金沢という地に縁も所縁もない「遠所者」であることを自覚しており、かつ不眠症にかかっており、眠るということが困難な状態になっている。その不眠症もあってか蟹を幻視するという精神状態に陥っており、一種の「境界性」を帯びているといえよう。この主人公の帯びた「遠所者」という属性と関連して、赤坂憲雄氏は、「異人」の類型として、ある共同体に一時的に滞在し、いつかは去っていく漂泊者を挙げている。(赤坂 1992)「雪の下」の主人公も仕事のために住んでいる金沢という地を離れて、いずれ故郷に帰るであろう「遠所者」であるがゆえに、「境界性」を帯びた存在として立ち現れるのである。

一方、「大きなかに」では、おじいさんと孫の太郎が特に奇妙な体験をしている。おじいさんは、奇妙な男達から中身の入っていない蟹を貰い、太郎はおじいさんが白い海鳥に乗って帰ってきたという夢と目覚めた後、野原に灯る幾千本の蠟燭を目撃する。中身の入っていない蟹は、家族全員が目撃するが、この二人は、作中で特に奇妙な体験をしている。この二人が特に奇妙な体験をすることになるのは、おじいさんが老人であり、太郎が子どもというともに「境界性」を帯びた存在であることが大きく関わっているものと考えられる。老人は、加齢による身体の変化、また死に近づくことで生者でありながら死者の領域に近づく「境界的」な存在である。一方の子どもも「七つまでは、神のうち」という言葉に示されるように人間でありながら、未だ完全に人間になっていない「異界」に属する「境界的」存在であると考えられてきた。(黒田 1986) このことは、口承文芸において神仏が老人の姿をとって現れたり、子どもが神仏との交信を可能にする「依り代」として憑依儀礼で登場すること等に端的に示されている。「大きなかに」では、おじいさんは、言うまでもなく老人であり、太郎もまた子どもである。人間の領域にありながら神仏等の領域に近接するこの二人の登場人物が、奇妙な男達と遭遇したり、不思議な夢を見たり、野原に蠟燭の灯る光景を目撃するといった展開は、両者の帯びる「境界性」という観点から説明付けることが可能になる。

「雪の下」では、主人公の精神状態、「遠所者」という属性ゆえに「境界性」を帯び、「大きなかに」では、老人、子どもという年齢上の属性から「境界性」を発現させていた。この登場人物達が帯びている「境界性」は、作中で奇妙な体験をすることを必然的なものにする効果があったといえよう。

4-3. 登場人物達の「移動」

「大きなかに」では、おじいさんが海辺の村と自身の住む村に帰るまでの夜道を徘徊する。その途中で奇妙な男達に遭遇し、中身の入っていない蟹を受け取ることになる。一方、「雪の下」の蟹」は、東京から金沢に戻ってきたところから物語が始まり、豪雪に見舞われ、一時的に外部世界と遮断される。このように「大きなかに」、「雪の下」では、「移動」が作中にモチーフとして登場している。以下に、両作品中での登場人物の「移動」というモチーフも「境界性」と関わることを概観し、作中での意味を考察していきたい。

「大きなかに」の「移動」は、おじいさんが用事を終え、帰宅するための「移動」であり、しかも真夜中に行われる。「移動」という状態は、ある一定の場に止まる「停止」状態と異なり、一種の「非日常性」を帯びる。これは、「移動」を行わず、一ヶ所に止まる「定住」という状態に対して、当てもなく彷徨う「漂泊」状態にある者が「非日常性」を帯びることから派生している。漂泊者は、ある共同体に「外」から訪れる。そしてその「内」に一時的に止まり、また「外」に出ていくという軌跡を辿る。このように「外」から訪れる者に対して警戒する心性が、部外者＝漂泊者に対して畏怖と反感とが混然とし、漂泊者を「境界的存在」とみなすことに繋がり、「移動」という状態にも「非日常性」が付与される。(赤坂 1992)

「大きなかに」では、海辺の村からの「移動」がある。しかもおじいさんは、この「移動」の際に道に迷っており、通常の道を通らず、暗い夜道を一人で彷徨する。おじいさんが、奇妙な男達と遭遇するための条件として、「移動」のもつ「非日常性」、「境界性」が作用しているといえる。この「移動」は、家路を目指すためのものでなく、「異界」へと踏み込むための道行きとなっていたのである。

一方、「雪の下」は、主人公が勤務地へと戻る「移動」から物語が始まるが、それ以降、下宿、職場、居住地周辺を「移動」するだけで大規模な「移動」は行われない。これは、その後の豪雪により金沢の町が雪により降り籠められ、外部と遮断された状態になることも作用している。このように、雪に降り籠められて外部との交通が遮断された金沢の町の様子が描き出され、「外」に対して開かれたものではなく、閉じられた空間となっていることは、主人公の不眠症をさらに悪化させ、かつて見た蟹の幻を発動させる。この金沢の町が雪により閉ざされていることと主人公の内面に巣食う幻想の蟹が出現することは因果関係をもったものと考えられる³⁾。

「大きなかに」では、「移動」することがおじいさんを「異界」に導くことにつながり、「移動」と「境界性」が密接に結び付いていた。一方の「雪の下」では、「移動」は作中では顕在化せず、物理的に「閉ざされた」ことで主人公の内面に「境界性」が発生するようになっていた。つまり、「外」に対しての「移動」がなくなることで、一種の「境界性」が、主人公の内面に蟹の幻想という形で出現したのであった。

4-4. 奇妙な遭遇について

「雪の下」の物語の後半部で、同僚が主人公に瓜二つの人物に会い、主人公と間違える場

面がある。酒に酔っていた同僚が翌日、職場で主人公に昨夜会ったと告げるが、主人公はずっと下宿に居り、そんなはずはないと答える。同僚は、酒のせいもあり、人違いかということでそれ以上は追及しない。物語では、結局、このエピソードについて何であったのか真偽を明確にせず、言及もされない。

一方、「大きなかに」では、おじいさんが、帰路の途中、深夜の海辺で火を焚いている不思議な男達に遭遇するが、翌日、そんなことをしていた者達はいなかったと知らされる。正確には、孫の太郎と父親が調べに行き知られる事実であるが、奇妙な遭遇が、「雪の下」の蟹」、「大きなかに」に共通して描かれている。続いては、この遭遇の場面の意味について交互に検討していく。

まず、「雪の下」では、主人公の同僚が主人公に似た人物と遭遇する。同僚は、酒に酔っており、単なる人違いであった可能性も考えられるが、ここで、主人公が不眠症であり、幻視に苛まれている状態であることとの関連が想像される。もし、単なる他人の空似でないならば、同僚の見たこの人物は、主人公の「二重身」（ドッペルゲンガー）といえるだろう。主人公は、不眠症であり、幻の蟹を見ている。こうした精神的に不安定な状態のときに「二重身」が出現することが知られ、晩年の芥川龍之介がこうした「不安」に苛まれた精神状態にあり、「二重身」を目撃し、それを題材にした作品も残していることが知られている。（河合 1987）ここで、「二重身」の可能性については、作中では言及されないが、主人公の精神状態や豪雪による外部との遮断という付帯状況の「非日常性」が、「二重身」の出現という形に至ったのではなかろうか。

「大きなかに」でも、おじいさんが遭遇した男達の正体については、作中では蟹の「謎」同様解答が示されるわけではない。おじいさんが遭遇した謎の男達の正体を考察する上で参照にしたのは、男達の外見描写と遭遇した場所である。まず、男達の外見描写についてであるが、顔の色が「赤黒い」とあり、この「赤黒い」という描写から男達がこの世の者ではなく、「異界」の存在であることが窺える。なぜなら小川未明の童話群において、その特徴として「色彩語」の多用ということがある。その中で、「赤」と「黒」は、「異界」の存在を示す表徴であり、かつ否定的に描出される色彩であることが指摘されているためである。（山口・藤本 2007）また、民俗の世界においても「赤」、「黒」という色彩のシンボリズムには、「黒不浄」、「赤不浄」という用例に見られるように「日常」とは異なる「非日常」の意味が込められている。この男達の顔が「赤黒い」のは、単に焚き火に照らされてのことかもしれないが、おじいさんが持ち帰る蟹の異形性とも合わせると「異界」の存在を示す表徴と捉えた方が妥当であろう。

また、遭遇した場所に転じると「海辺」となっており、「海辺」が、民俗学では、「常世国」に代表される「海上他界」との接点となる場所であり、海の遙か彼方から来訪する神々を祀る儀礼等が行われることが知られている。（山折 1997）おじいさんが、「異界」との接点となる「海辺」で遭遇した奇妙な「赤黒い」顔をした男達は、蟹がもたらされた後のおじいさんと北国の変化や春をもたらす異人の来訪伝承等と合わせると「異界」の存在であると推測出来る。さらにおじいさんが男達と一緒に酒を飲んでおり、「異界」の飲食物を口にするこの世に戻れなくな

るという「黄泉喫食」の伝承もおじいさんは亡くなってはいないが、後の衰弱していることへ影を落としていると考えられる。

「雪の下の子」での同僚のエピソードは、主人公の置かれた状態から一種の「二重身」との遭遇と考えられ、「大きななかに」でのおじいさんの体験は、「異界」との遭遇であり、おじいさんと北国のその後を大きく変化させた。ただし、「二重身」は、自己の内部から出現するのに対し、異人達は、外部から出現するという相違点が見られた。しかし、両者ともに「境界性」を帯びた存在であるという共通点では重なり合うのである。

4-5. 結末について

「雪の下の子」は、結末で、豪雪が収まり、金沢に春の兆しが見え、その際、主人公は、見知らぬ老人とともに春が訪れた金沢の空を見上げている。結末部分で唐突に老人が登場し、その描写をもって物語が結ばれているのである。

一方、「大きななかに」では、おじいさんが孫の太郎とともに重要な役回りを演じている。おじいさんが見知らぬ男達から蟹を受け取り、その蟹を受け取ってから数日後に北国に春が訪れている。この二作品には、共通して老人が登場し、また結末において豪雪が過ぎ去り、明るい春の情景が描かれる。次に、この老人の登場と結末の因果関係について考察することにした。

「雪の下の子」では、豪雪が止み、陽の光で雪が解け始める。この際に老人が登場し、晴れた空を見上げる。この老人は、「大きななかに」でのおじいさんの役割と近似した存在であると考えられる。まず、雪に降り籠められた状態からの脱却が行われ、明るい春へと移行している。この生命に満ちた春への移行の際には、それまでの古い生命を体現する存在との対比が求められるがゆえに結末に唐突に老人が登場するのではないかと考えられる。雪解けを経て、主人公の「不安」に包まれた内面が、明るい日差しを受けて少しずつ緩んでいく。このことは、雪解けとともに「霞が晴れる」光景を見た主人公が、金沢の町を覆っていたものの正体が分かったと思う結末での場面に集約されている。町を覆う雪と霞が消えることで、主人公の内面の「死」に対する「不安」が緩和されていく。雪に閉ざされた金沢の町と主人公の内面が同一視されており、この両者を覆う雪、霞、「死への不安」といった負の要素の払拭を新旧の生命の更新、冬から春への移行を象徴する老人の登場は可能にしているのであろう。

一方、「大きななかに」では、おじいさんが蟹を持ち帰ってから衰弱するが、北国に春がもたらされている。概述の生命の新旧更新という観点からすると古い生命を体現するおじいさんが、新たな生命力の籠められた「容器」である蟹を持ち帰り、北国に春が訪れる。しかし、おじいさんは、次第に衰弱していくという「生と死」の循環が描かれていた。「雪の下の子」、「大きななかに」とともに春の訪れをもたらす上で重要な役割を果たす老人が登場することで、「生と死」、「新旧」、「明暗」が相補関係にあることを示している。

おわりに

古井由吉「雪の下の蟹」は、執筆された時代背景、作者の置かれた状況や生い立ち、問題意識といった違いこそあれ小川未明の童話「大きなかに」との作品の構造上の類似性が散見された。古井自身は、「雪の下の蟹」の執筆にあたり、小川未明「大きなかに」から一種のインスピレーションを得たというような発言はしていない⁴⁾。だが、この二作品には、蟹というモチーフのみならず、「移動」や「境界性」を帯びた登場人物達、雪により閉ざされた暗い冬から明るい兆しを見せる春の訪れを予感させて終わる結末等というように、小説と童話というジャンルの相違を越えて類似のモチーフが抽出可能となった。かつて文化人類学者のレヴィ＝ストロースは、異なる地域、民族間に伝承されている神話の比較分析を通して「神話の構造」——神話を構成している共通の文法と可変部について考察した。(小田 2000) 一つの神話だけを見ても判然としなが、類似したモチーフをもつ他の神話と併置することでその隠された「神話の構造」を解き明かすという試みであり、「比較」がその手法の中心にあった。本稿では、作者が判明している二つの創作作品を題材とし、「比較」したわけだが、今後、この手法を精緻化し、古井作品や未明童話におけるモチーフの分析を進展させることを課題としたい。

注

- 1) 「雪の下の蟹」の本文は、1982 年刊の『古井由吉作品』第 1 巻、河出書房新社に拠った。
- 2) 「大きなかに」の本文は、1977 年刊の『定本 小川未明童話全集』第 3 巻、小学館に拠った。
- 3) 「雪の下の蟹」を含む古井由吉作品における空間の描写については、和田、1996 に詳しい。
- 4) 「雪の下の蟹」の材源について古井は言及していないが、主人公が海岸を訪れ蟹を幻視する場面での海岸のモデルは、石川県の内灘海岸であると語っている。(水洞 2012)

参考文献

- 赤坂憲雄、1992、『異人論序説』筑摩書房。
- 小川敏栄、2007、「かにの変容——小川未明の『大きなかに』を読む」『埼玉大学紀要 教養部』43 (1)、47-53。
- 小田亮、2000、『レヴィ＝ストロース入門』筑摩書房。
- 狩野敏次、2011、『闇のコスモロジー 魂と肉体と死生観』雄山閣。
- 河合隼雄、1987、『影の現象学』講談社。
- 黒田日出男、1986、「「翁」と「童」——中世日本の老人と子どもをめぐって」『境界の中世 象徴の中世』東京大学出版会。
- 斎藤明子、1998、「内へと籠るエネルギー：古井由吉の深層世界」『日本文学』89、東京女子大学、56-65。
- 水洞幸夫、2012、「古井由吉『雪の下の蟹』」『北陸近代文学の舞台を旅して』北國新聞社、58-65。
- 中沢新一、2008、『古代から来た未来人 折口信夫』筑摩書房。
- 舟木枳郎、1990、『小川未明童話研究』日本図書センター。

- 松浦雄介、2004、「反復する身体：古井由吉における記憶と生」『京都社会学年報：KJS』12、京都大学、73-90.
- 松本道介、2008、「古井由吉「雪の下」の蟹」『國文学：解釈と鑑賞』73（11）：至文堂、145-150.
- 山折哲雄、1997、『日本人の宗教感覚』日本放送出版協会.
- 山口幸祐・藤本紗貴子、2007、「未明童話における「色彩語」について 調査結果からの考察」『富山大学人文学部紀要』46、富山大学、119-131.
- 和田勉、1996、「古井由吉論：〈空間〉へのこだわりと〈音声〉の重層性をめぐって」『九州産業大学国際文化学部紀要』6、九州産業大学、15-28.